

## 第4回アジア養蜂研究協会大会

吉田 忠晴

アジア養蜂研究協会 (AAA) が主催する標記の会議 (Fourth Asian Apicultural Association International Conference) がネパールに本部をおく国際総合山岳開発センター (ICIMOD: International Centre for Integrated Mountain Development) との共催で、1998年3月23日～27日にカトマンズ市で開催された。

大会を運営した ICIMOD は、UNESCO の提唱で1981年に設立されたヒンドゥークシ・ヒマラヤ地域 (アフガニスタン、パキスタン、インド、中国、ネパール、ブータン、バングラデシュ、ミャンマーの8か国にまたがる大ヒマラヤ山脈と山麓丘陵部) の総合的な山岳地域開発のための国際組織である。ICIMOD ではトウヨウミツバチを用いた養蜂が山間農業システム研究特別プロジェクトとして、研究や研修、普及などの活動が実施されている。

主会場は市内の豪華な国際会議場である。今回の大会は、アジア地域の経済不安から参加者の減少が懸念されたが、23か国から200名以上が出席し賑やかな大会となった。ただインドネシア、フィリピンからの参加がなく、韓国、タイからの参加者が減少したことは残念であった。

日本からはアジア養蜂研究協会主催ツアーの11名のグループと玉川大学スタッフの11名のグループの計22名に、個人的に9名の方々が加わり、総勢31名と多くの方々に参加いただいた。

今回は、初めて本大会前の23日と24日午前の両日にワークショップが開催された。そのため玉川大学スタッフグループは、ワークショ



図1 開会式：真剣に聞に入る参加者

ップ、本大会の事前打ち合わせのために、3月17日に日本を出発、バンコクに1泊の後、18日にカトマンズに到着した。

ワークショップ、本大会の様子を日程を追って紹介する。

ワークショップは、カトマンズの南、パタンの町の入り口に位置するホテル・ヒマラヤを会場として、3月23日、午前10時に開会式が行われ、ICIMODのEgbert Pelinck 所長、AAAの松香光夫会長、各ワークショップの代表の挨拶が行われた。

「病気と害敵」ワークショップは、60名の参加のもとで、23日の開会式後の午前には、S. Wongsiri (タイ) と K. K. Shrestha (ネパール) が座長となり、トウヨウミツバチで最も問題となる病気の「タイサックブルード病」部会であった。「タイでのタイサックブルード病の状況、S. Aemprapa」、[ベトナムでのタイサックブルード病の防除、P. H. Chinh]、ネパールでのタイサックブルード病の研究、K. K. Shrestha]、[南インドでの養蜂におけるタイサックブルード病の影響、C. C. Reddy]の発表が行われ、タイサックブルード病発生の歴史と現状、診断と治療法、予防のための蜂群管理法が検討された。23日の午後からは、O. Boeking (ドイツ) と K. S. Woo (韓国) が座長となり、「ミツバチヘギイタダニ」の部会が進められた。私はトウヨウミツバチに寄生したミツバチヘギイタダニの特異的な事例として「ニホンミツバチにおけるミツバチヘギイタダニの寄生と繁殖」について発表した。続いてミツバチヘギイタダニ被害の現状分析と対策、予防法について検討された。



図2 ワークショップ：議論が白熱した

「養蜂振興」ワークショップは、N. M. Saville (ICIMOD・ネパール) と N. Bradber (英国) を座長に実施された。在来種のトウヨウミツバチを用いた養蜂振興に携わる技術専門家や開発計画立案者など40名が参加。現在直面する問題点を洗い出し、問題の解決を図るための討議や実際に村を訪れて実務指導のデモンストレーションが行われた。

24日午前は、引き続きホテル・ヒマラヤで両ワークショップの討議が行われた。前日のワークショップで提案された内容が紹介され、それぞれの検討の後、声明文が決議された。さらに今後の大会においてもワークショップの開催の継続が確認され、盛会のうちに終了した。

午後からは、カトマンズ盆地南のゴダワリにあるICIMOD蜂場に大会参加者やワークショップ出席者が移動。ネパールで開発された麦わら巣箱やジウムラトッパー巣箱などの説明を受け、野外に設置された昼食会場で歓迎会が行われた。昼食後には王立植物園、農業省の蜂場を見学した。研究発表の前に、参加者が一同に会した蜂場見学会は、参加者同士の友好が計られ、有意義なものであった。

夕刻の7時からは、25日に行われる総会の前に、今回の大会で初めて企画された役員会がホテル・ヒマラヤで開催された。AAAの分科会委員、各国支部長、大会役員、ワークショップ役員、会議セッション委員の約40名が参加した。私自身は事務局長として、松香光夫会長、インドのVerma、タイのWongsiri両副会長と共に議長団をつとめ、会議の進行役として最も緊張した時であった。報告事項の後、分科会委員の追加や交代が認められた。2年後の2000

年の第5回大会は国際ミツバチ研究協会 (IBRA) との共催で、タイ・チェンマイでの開催が承認された。第6回大会には、インド・バンガロール、トルコ・アダナ、パキスタン・イスラマバードが立候補し、2000年までに調整することになった。会議の声明文はWongsiri副会長を中心に作成し、閉会式で読み上げることに決まり、役員会を無事に終えることができた。

25日は、9時から国際会議場で第4回大会の開会式が行われた。ICIMODのEgbert Pelinck 所長の歓迎の挨拶、AAAの松香光夫会長のネパール大会開催のお礼のほか、ネパール政府からRam Krishna Acharya 農業大臣の挨拶があり、開会式を盛り上げた。セレモニーに続いて、ICIMODで長らく養蜂振興に従事していた副会長でもあるインドのVerma博士による「トウヨウミツバチの保護と飼育管理」の基調講演が行われた。開会式後には、国際会議場の別室で開催の博覧会がオープンした。農業大臣、大会役員は20の展示場を一つ一つ視察した。日本からはミツバチ科学研究施設と井上養蜂研究所が加わり、研究施設から絵葉書セットを大臣に贈呈した。

その後、ミツバチ生物学のセッションに入った。セッション冒頭には、オーストリアのPechhacker博士より2月3日に逝去されたRutner博士のミツバチ研究への貢献が紹介され、出席者一同、黙禱を捧げ、ご冥福をお祈りした。

ミツバチ生物学の発表数は13題と多く、そのため午後も引き続いて実施された。日本から筑波大学の松山氏がアジアのミツバチの働き蜂フェロモン成分について、玉川大学関係では佐

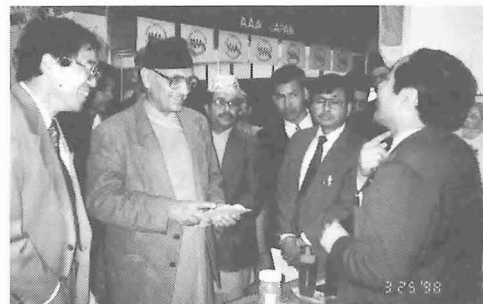


図3 博覧会：養蜂研究所のブースを訪れた農業大臣

々木教授が吻伸展反射による記憶、学習の評価について発表した。全体的には開催国のネパールや地の利を生かして多数参加したインドからの発表が多い傾向となった。各セッションでは、ポスター発表が平行して行われ、玉川大学から松香、吉田、中村、大友、大学院生の市川、卒業生の吉垣、畜産試験場の天野氏が発表した。ポスター会場の一郭には、各国の養蜂事情を解説したカントリーレポートも張り出された。

セッション終了後には、AAAの総会が行われた。前日の役員会で討議された内容がほぼ承認され、会議進行役の私にとっても肩の荷がおりた一時であった。続いてビデオ、スライドの会があり、次回開催のタイの養蜂事情などを鑑賞した。

26日午前は養蜂技術、生産物セッションが行われた。午後の養蜂振興では、14題の発表があり、ネパール、バングラデシュ、ベトナム、インド、パキスタンでのトウヨウミツバチによる養蜂振興やセイヨウミツバチ養蜂の問題点などについて発表があり、活発な討議が見られた。そのため夕刻からの予定されていたビデオ、スライドの会にセッションが大きくずれ込んだ。ビデオ、スライドの会の方はオオミツバチのハニーハンティングなど8題の発表があり、会が終了したのは午後9時過ぎであった。

最終日の27日には、午前に蜜源植物と花粉媒介、午後には害敵と病気のセッションが行われ、日本から科学技術振興財団の笹川氏がニホンミツバチのミツバチヘギイタダニに対するグルーミング行動について発表した。



図4 ポスター発表：研究者の情報交換の場



図5 断崖のヒマラヤオオミツバチ

今回の会議では、口頭発表が53題、ポスター発表31題、ビデオ・スライド発表8題と、当初の予想を遥かに超えた発表数となり、大会を盛り上げるだけの内容となった。

セッション終了後の閉会式では、酒井哲夫前会長やこれまでの第1回から3回の大会を主催したタイ・チュラロンコン大学、インドネシア森林省、ベトナム農業・村落開発省の関係者にそれぞれ感謝の盾が送られた。Verma副会長から大会決議と提言が紹介された後、次回開催のタイにAAAのプレートが手渡された。

夜のサヨナラパーティーでは、ネパール料理と民族舞踊を楽しみながら、参加者との別れを惜しんだ。

玉川大学スタッフグループは、大会前後に企画されたオオミツバチ、ヒマラヤオオミツバチの観察旅行に、ポーランドのWoyke夫妻やオーストラリア、ドイツからの出席者と共に参加した。20日～22日のオオミツバチの観察は、カトマンズ南西のチトワン国立公園内をゾウに乗り、途中でサイ、ワニなど野生動物を見ながら、樹上のオオミツバチの観察した。夜はハニーハンティングを見学するなど、有意義な旅行であった。大会後の中国国境のコダリでのヒマラヤオオミツバチの見学は、ハニーハンティングの様子は天候や時間の関係で見ることができなかったが、岩場に造られたヒマラヤオオミツバチの巣を初めて見ることができ、感激であった。コダリでは、中国との間に架けられた友好橋の中央に国境があり、パスポートなしで、中国にほんの少し足を踏み入れるなどの経験をした。(〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1

玉川大学ミツバチ科学研究施設)

## 第4回アジア養蜂研究協会大会 1998年3月23日～27日 (ネパール・カトマンズ) 決議と提言

### I. 謝辞

アジア養蜂研究協会 (AAA) はネパール カトマンズにおける第4回大会の開催にあたり、オーストリア大使館と ICIMOD から提供された資金面、後方支援面を記して感謝する。

養蜂は人々に収入をもたらす、かつ環境にやさしい重要な活動であり、ミツバチはその花粉媒介行動により、山間地の作物生産性を高め、生物多様性を守っている。養蜂研究・開発事業はそれらの点から ICIMOD の設立趣旨、活動方針に沿った、ふさわしいものといえる。

AAA は ICIMOD が参加各地域において研究、研修、振興事業の支援を継続するよう希望する。

### II. 決議と提言

1. アジア各地では、生物地理環境に応じて在来のミツバチ種、あるいは導入種ミツバチを用いての、養蜂の近代化が促進されている。しかし社会の基本的構造基盤整備の遅れ、習熟した人材の不足、研究、研修、振興事業のための施設の不備によって、アジアの養蜂産業にはまだかなりの援助が必要である。

AAA は、アジアの養蜂のさらなる発展をめざすため、継続的な、国際的資金援助に基づいたアジアのミツバチと養蜂の研究研修センターの域内設立に向けて、組織的な協力、努力が続けられるよう決議する。

2. 21世紀の農業の持続的発展にはミツバチによる花粉媒介が不可欠要素となろう。ミツバチの活動は様々な農耕システムの持続性、多様性と高い生産性に貢献するからである。しかしアジアの開発途上にある諸国では、ミツバチが作物生産に果たす役割の認識が不十分である。トウヨウミツバチは農作物の送粉者としてセイヨウミツバチにはない利点を持っている。

AAA は政策の企画立案者、および援助活動組織の人々が、持続可能な農業と村落開発のための重要な要素としてトウヨウミツバチを用いた養蜂を認識し、これを振興するように決議する。

3. トウヨウミツバチは我々の自然生態系内の不可欠な要素であるが、現在野生群は急速な減少傾向にあり、絶滅が危惧される状態である。生物の多様性維持のためにもトウヨウミツバチの保護は不可欠である。

AAA は国際機関に対し、トウヨウミツバチ養蜂の普及を通じて、この遺伝子資源の保全計画を支援するよう要請する。

AAA は新たに作られた「トウヨウミツバチの保全と振興」作業部会の活発な計画、活動に期待する。

4. ヒンドゥークシ・ヒマラヤの一部で、セイヨウミツバチのもつ経済的価値に匹敵するほどの高い生産能力のあるトウヨウミツバチ亜種や地理的生態型が発見されている。

AAA はトウヨウミツバチの経済的、生物学的形質についてさらなる遺伝的多様性の研究、優良系統の選択、実地試験が、類似した環境にある各地域毎に進められるよう決議する。

5. 養蜂の振興普及とは技術と知識の交換に基づく事業であるが、どのような方法がこれをもっとも円滑に行えるのか、理解されていない部分も多い。AAA は、養蜂振興普及事業のネットワークが作られるよう提言する。

6. ミツバチトゲダニ、ミツバチヘギイタダニ、タイサックブルード病の脅威はアジアのミツバチにとって深刻なものである。そこで AAA は参加各国がそれぞれの環境条件における基礎、応用研究を進め、タイで開かれる次回大会においても、再びミツバチ病理学のワークショップを開催することを決議する。

7. ICIMOD における養蜂プロジェクトはトウヨウミツバチ養蜂の各分野で大きな成果を上げている。花粉媒介者としてのトウヨウミツバチの優位性の研究、養蜂植物研究と花粉分析、遺伝的多様性の研究、麦わら巣箱、ジウムラトップバー巣箱などの適正技術の開発、農民参加型の養蜂振興事業等である。

AAA はこれらの重要な知見がアジアの各地で試みられ、広く普及するよう決議する。

8. AAA はその参加各国において、ミツバチ生産物の公正な市場形成を促す政策が立てられ、生産者と消費者との双方の利益となるべく、実施されるよう提言する。